様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２９ 日現在

機関番号：１３３０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０５７９

研究課題名（和文）文法と言語進化：認知言語学の観点から

研究課題名（英文）Grammar and the evolution of language: A cognitive linguistic perspective

研究代表者
中村　芳久（Nakamura, Yoshihisa）

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：１０１３５８９０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,800,000円、（間接経費）　540,000円

研究成果の概要（和文）：２つの認知モード（IモードとDモード）を提案し、これにより、文法進化の認知的原理が、IモードからDモードの認知的展開により、捉えることが可能であることを示した。Dモードのメタ認知的機能は、人間の言語能力の根幹をなす再帰性の認知的基盤であり、一方、外置（displacement）は、６層からなる言語進化の第５層目の文法化を決定付ける要因である。

研究成果の概要（英文）：We have proposed two modes of cognition (I-mode and D-mode) and have shown that the cognitive transition from I-mode to D-mode is critical to the evolution of language. The meta-cognitive function of D-mode makes a conceptual base for the emergence of syntactic recursion which is identified as the only uniquely human component of the faculty of language, whereas displacement itself is a decisive factor for the grammaticalization of categories at layer V of the 6-layer scenario of language evolution.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：認知モード　Iモード　Dモード　文法進化　言語進化

１．研究開始当初の背景
言語進化研究は、確かに、尋常ならざる学際的な状況にあり（進化学、生物学、動物行動学、生態学、遺伝学、脳神経科学、科学哲学、心理学、コンピュータ・モデリング等々からの研究があふれている）、これを無視することはできない。しかしながら、本研究では（言語の断片的知識に基づくのではなく）、言語の通言語的、通時的研究、あるいは言語の対照的・類型論的研究に基づく言語の総合的知見を中心にして（むろん他分野の研究も視野に入れ）、認知言語学・認知文法の観点から、論理的に妥当な言語進化・文法進化の仮説を提示する。

２．研究の目的
本研究では、言語と文法の起源と進化について、認知言語学とりわけ認知文法の観点を軸に、論理的に妥当で、かつ現時点の言語のあり方までをも自然な形で説明する言語進化モデルを提示する。生成生物言語学の観点からの再帰的結合（recursive combination）を中心に置く論点ではなく、ヒトにのみ進化した一般的な認知能力によって切り出される要素自体に結合する性質が内在しており（自律要素が依存要素を精緻化する）、可能な結合形態の中から一定の結合形態（文法構文や文化）が社会的に淘汰選択されるとする。最後に、要素や概念の切り出しには、I モード認知から D モード認知へのヒト特有の認知的展開が関与していることを論じる。

３．研究の方法
(1)文献調査（独自の言語分析の他に、言語の通言語的研究、文法化や通時的研究、言語発達、認知的言語対照・言語類型論の研究等の成果には特に注目したい。綿密な言語分析・観察によって、認知モードの展開と並行する文法化等の現象が確認されれば、言語起源や言語進化についても、純粋な言語研究の観点から、ある程度の見通しが得られるからである。むろん他分野におけるさまざまなアプローチからの言語起源・言語進化の研究成果にも十分配慮する。）(2)国内外の研究者との交流、国内外の学会でのワークショップ・シンポジウムの開催。(3)学会発表、論文、報告書、翻訳、著作の執筆、など。

４．研究成果
本研究の中心論点は、認知モードの展開、とりわけＩモードからＤモードへの展開が言語とコミュニケーデョンの進化に対して決定的な認知的要因であるという点であるが、次の３点で成果が得られた。
　成果の(1)第一点目は、本研究を取り巻く研究群の総括として、２つの認知モードが、認知科学で注目されている認知の二重過程説をもとらえるものであることが判明した点である。Ｉモードから D モードへの展開を導入しているため、ヒトの個体発生的、系統発生的進化を捉えることが可能な点でも、本研究は優れている。特に、生成文法の再帰的結合（recursive combination）を言語の特性とする論点（Hauser, Fitch and Chomsky 2002, Hauser 2009a, 2009b）に対して、①言語の記号性、②単文レヴェルの単純結合、③複文レヴェルの複雑結合、これら各面の起源と進化について一定の説明が得られた。すなわち、結合される要素自体に結合する性質があるからこそ、要素の結合が成立するのであり、特別な結合のための能力は要らない、ということである。要素は自律的要素と依存的要素の 2 種類であり（Langacker 1997）、自律的要素が依存的要素の精緻化する形で自由に結合するが、さまざまな自律的要素とさまざまな依存的要素が自由に結合するなかから、社会的に選択・淘汰されて一定の結合形態としての文法構文（や概念結合）が定着し、構文ネットワークとしての文法知識・言語知識を構成する。また、複文レヴェルの複合結合では、依存的要素が自立的要素として捉えなおされ、上位の依存的要素に組み込まれ、これが繰り返されるといわゆる再帰的結合を成立させることになる。例えば、概念レヴェルで、依存的要素である「泳ぐ」が、モノ化能力（reification, Langacker 1991）によって、自立的要素「泳ぐこと」になると、上位の依存的関係概念「好き」のトラジェクターを精緻化し、「泳ぐことが好き」という複雑結合が成立する。さらにこれがモノ化され、さらに上位の依存的関係概念「よい」に組み込まれると「泳ぐことが好きなことはよい」という具合に、理論的には無限に複雑な結合が成立することになる（したがって、要素として自律的要素と依存的要素とを認め、認知能力としてのモノ化能力を認めておけば、再帰的結合はその帰結として成立することになる。）
　自律的要素と依存的要素の２種類の要素を、認知内容のなかからどう切り出すかということに対しては、十分な考察を必要とするが、おそらく概念レヴェルでは、自立的要素としての「モノ」と依存的要素としての「動き」を切り出すような基本的な認知能力が関与しているものと考えられる。この点についてはさまざまな角度から検討を加えた。しかし、そもそもの概念や要素の「切り出し」については、ヒトの外置能力（displacement, cf. Hocket 1960）が関与していると考えられる。＜いま・ここ＞から自分を切り出して、過去や未来、あるいは空想の世界に置くことを可能にする認知能力である。この能力によって、例えば「鳥飛ぶ」という統一概念から「鳥」という概念と「飛ぶ」という概念を別々に切り出すことができるというわけである。
　成果の(2)第二点目は、認知モード、とりわけＩモードの内部が詳細に見えてきたことである。Ｉモードでは、単純に概念が未分化でカオス状態であるのではなく、認知言語学で注目されるイメージ・スキーマや基本レヴェ

ルカテゴリがアトラクタとして創発していることも判明してきた。そのイメージやカテゴリを基盤に、一部Ｄモードで具体性の高い表象が構築される。

Ｉモードについて、さらにその初源へ辿っていくと、認知の主体と客体ですらが確立せず、区別されていない状態へと到達する。それがインタラクションの究極の形態で、主客未分の状態である。西田が「未だ主もなく客もない、知識とその対象とが全く合一している」とした状態であり、「色を見、音を聞く刹那、未だこれが外物の作用であるとか、我がこれを感じているとかいうような考えのないのみならず、この色、この音は何であるという判断すら加わらない前」の状態である（西田幾多郎 1911『善の研究』冒頭部）。W.ジェイムズはこのような状態を the primordial chaos of sensations（感覚の初源的カオス）と呼び、そのような経験状態は「知覚の原始的な段階を指示しており、そこでは後に必要となるような区別がいまだなされていない」(W.ジェイムズ『純粋経験の哲学』p.151)とする。そのような感覚の初源的なカオスの縁にアトラクタとしてモノやコトが創発し、認知主体と客体の区別も生じ、ヒトの場合、いわゆる外から眺める視点（Dモード）を獲得し、話し手となったということができる。言葉を用いる思考が、思考の蓄積と概念のビックバンを可能にし、類まれなる進化を可能にしたわけである。

「外の視点」「内の視点」ということが言われ、一般には、単に外的視点が、状況の中に入って観るのが内なる視点だというように考えられがちだが、それはもともと主客対峙の主が客（状況）の中に入っていくのだから、Dモード認知のバリエーションに過ぎない。ここで論じるＩモードでは、より本質的に、the primordial chaos of sensationsの中ですべてが渾然一体であるために、そこで創発する主体と客体も未だ不可分であり、その意味で、主が客（状況）の中にあるように思えるだけである。

Ｉモード認知は、初源的な感覚のカオスからアトラクタとして何者か（X）がインタラクションを通して創発するという発想に近いが、これを次のように整理して捉えておくことができる。

■ In I-mode, some portion of the primordial sensations will emerge as an attractor or X.

ここで創発するXを純粋客体と見立てて、眺め叙述しようとするのがDモードである。単純化して言えば、認知の殆どは（ときには意思ですらが）Ｉモードに創発するもので、それを若干修正して受け入れ眺めるのがDモードだということである。研究者や科学者の目は、より反省性の高い高次のDモードで、デカルトの我のように認知像の修正を試みる。（この行き過ぎを咎めるのがメルロ＝ポンティらの身体論的Ｉモードへの還元である。認知モードが認知科学の中でどのように捉えられるかはStanovich(2004)などを基に別に論じたい。）

成果の(3)第三点目は、次のようなより総合的な結論が得られたことである。

■Langackerの認知構図が、観る・観られ関係（e.g. 2008:260）を基軸とするのに対して、認知モードを採る立場は、認知の場（field of cognition）を基軸として、Ｉモードでは認知の場に認知像が、主格未分のインタラクションを通して、出来し・形成され、Dモードではあたかも認知主体が認知の場の外に出るようにして（displacement）、Ｉモードの認知像を、客体として眺める。このような2つの認知モードを措定し、かつＩモードからＤモードへの移行を考慮することによって、言語記述の射程は拡大し、より細やかな分析も可能となる（e.g. 中村2009）。

さらに言語の中心的特性とされる再帰性だけでなく、ヒトのコミュニケーションを支える利他性をも、認知モードが捉えるであろうという予測が立った点も、今後の研究につながる成果である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2件）

(1) 中村芳久　Langacker認知構図と認知モード　『日本英文学会第８５回大会Proceedings』(2013）121-122　査読なし

(2) 中村芳久　認知モード・言語類型・言語進化－再帰性（recursion）との関連から－　*Kanazawa English Studies* 28(2012）285-300 査読あり

〔学会発表〕（計　5件）

(1) 中村芳久　Modes of cognition and cognitive linguistic typology 第12回国際認知言語学会　2013 年 6 月２８日 University of Alberta(Canada)

(2) 中村芳久　ヒトのコミュニケーション：認知的基盤と起源　金沢大学認知科学シンポジウム　2013年３月７日　金沢大学（石川県）

(3) 中村芳久　Modes of cognition, types of language, and language evolution 2013年2月1日　Indiana University of Pennsylvania（米国）招待講演

(4) 中村芳久　Langacker 認知構図と認知モード　日本英文学会北海道支部第 57 回大会　2012 年 9 月 30 日、北海学園大学（北海道）
(5) 中村芳久　認知言語学から見る英語教育　札幌大学英語研修会　2012 年 8 月 10 日　札幌大学（北海道）招待講演

〔図書〕（計　1 件）
(1) 中村芳久　認知文法研究：主観性の言語学（博士論文 399 頁、2011 年、神戸女学院大学（英文学））2014 年 9 月くろしお出版より刊行予定（現在初校待ちの段階）

６．研究組織
(1)研究代表者
中村 芳久（NAKAMURA, Yoshihisa）
金沢大学・歴史言語文化学系・教授
研究者番号：10135890